〔研究会報告〕

「文学と宗教」研究会　アメリカにおける越境者の文学
――仏教との関わりから考える

末村正代

SUEMURA Masayo

はじめに

2023 年 3 月 5 日、複数の科研費研究による共催、南山宗教文化研究所の後援という形で、第一回「文学と宗教」研究会「アメリカにおける越境者の文学――仏教との関わりから考える」が開催された。20 世紀初頭に渡米した日本人作家や詩人、禅僧が綴った文学を、仏教との関わりという観点から読み解くことを目的として、ニューヨークを舞台とした佐々木指月、ロサンゼルスを拠点とした千崎如幻、シアトル・サンフランシスコ周辺で活躍した翁久允が取り上げられた。以下、はじめにプログラムを示し、次いで各発表・コメント・フロアとの質疑応答の順で要略を記す。

2023 年 3 月 5 日（日）9 時～ 12 時
発表①：堀まどか（大阪公立大学教授）
　　佐々木指月の宗教と文学の距離――禅、詩、ナンセンス随筆
発表②：末村正代（南山宗教文化研究所研究員）
　　北米禅に底流する詩情――千崎如幻とその詠歌
発表③：水野真理子（富山大学准教授）
　　コスモポリタン翁久允の軌跡――移民地文芸・郷土研究・仏教
コメント：守屋友江（南山宗教文化研究所第一種研究所員）

発表①：堀まどか氏

一人目の発表は、堀まどか氏による「佐々木指月の宗教と文学の距離――禅、詩、ナ

ンセンス随筆」であった。

発表では、1906年に渡米し、ニューヨークを拠点として活動した臨済禅者であり文人、佐々木指月（1882–1945）が取り上げられた。冒頭では、指月の文芸を俯瞰し、その文芸空間の三区分（①近代日本の詩壇／②ニューヨーク／③日系移民コミュニティ）と、その文芸の三区分（①詩作／②随筆や小説／③上記二つを含む禅を伝える言葉）が示された。次いで、当時の文人がアメリカ西海岸を目指した背景として、野口米次郎の欧米での活躍と成功があったことが紹介された。指月の詩作に関しては、1916年『郷愁』、1922年『言葉の鳥籠』の二詩集に注目して、渡米後に詩作をはじめた経緯、詩作に集中した時期と理由、窪田空穂をはじめとする同時代人の評価にもとづき彼の詩が禅と深く結びついている点が指摘された。他方、1940年代まで継続的に執筆された「ナンセンス文学」をはじめとする散文に関しては、いわゆる〈アメリカもの〉随筆の先駆として、政治、風俗、文学、宗教などを幅広く扱い、日本文壇で評価と人気を得ていたことが報告された。最後に、これまで看過された指月の文芸、とくに日本語文学としての独自性と、芸術家と禅者が共存する越境者の境地を、社会や文化の全体像を含めて解明する必要があるとの見通しが示された。なお本誌には、本発表を踏まえた堀氏の論文「佐々木指月の詩作と禅までの距離――詩集『郷愁』の成立と同時代評を中心に」が掲載されている。参照されたい。

発表②：末村正代

二人目の発表は、末村正代による「北米禅に底流する詩情――千崎如幻とその詠歌」であった。

発表では、1905年に渡米し、アメリカ西海岸を拠点とした臨済禅者、千崎如幻（1876–1958）の禅布教と詩作が取り上げられた。冒頭では、千崎の活動の三区分、1920年代のサンフランシスコ「浮遊禅堂」時代、1930年代のロサンゼルス「東漸禅窟」時代、1940年代の強制収容所「ワイオミング禅堂」時代が示された。1920年代の浮遊禅堂に関しては、当時の西海岸の混交的宗教状況を象徴する人的交流が見られることが報告され、その一例として、ユダヤ系アメリカ人スーフィー、サミュエル・ルイスとの交流が挙げられた。1930年代、ロサンゼルスに居を定めた東漸禅窟に関しては、禅窟に併設された「群英学園」の活動にアクセントを置いて紹介された。坐禅や法話を担う東漸禅窟に対して、群英学園は欧米人弟子に俳句、茶道、生け花など日本文化を教授する役割を担っており、その文化的活動が禅への参画や理解も推進していたことが指摘された。1940年代のワイオミング禅堂（戦中）に関しては、数多くの作品が史料として残されていることから、強制収容所における日系移民の生活や心情を知る手がかりとなり得るという可能性が示された。最後に、千崎の開教における詩歌とは、師と弟子が言葉を介

して禅の境涯を深め合う言語的・主体的・双方向的実践という点で、受動的に鑑賞されるもの（能や和楽器など）や、言語を伴わないもの（茶道や生花など）とは一線を画するという見解が示された。

発表③：水野真理子氏

最終発表は、水野真理子氏による「コスモポリタン翁久允の軌跡――移民地文芸・郷土研究・仏教」であった。

発表では、1907 年に渡米したジャーナリスト・作家・郷土史研究家である翁久允（1888-1973）が取り上げられた。冒頭では、在米中に展開された移民地文芸論と、1930 年代以降の郷土研究、戦後の三尊道運動のつながりと、そこに見られるアメリカ体験の影響を考察して、アメリカ・日本・富山にわたる翁の活動を包括的に捉えるという研究目的が示された。まず、アメリカ時代の移民地文芸論に関しては、それが世界文学の一ジャンルとして社会変革の役割を果たすべきものであるという彼の主張が提示され、ここにはアメリカ体験のなかで形成された彼の「世界人」というコスモポリタン思想が底流しているという見解が示された。次に、その「世界人」思想が、民族性を撥無するものではなく、かえって民族性を堅持することによって、自文化の尊重から他文化の尊重、差別なき世界へと発展する内実をもつことが解説された。さらに、こうした民族性堅持の思想は、1930 年代における仏教およびインドへの関心、その後に着手された富山での郷土研究においても基盤となるものであったことが指摘された。最後に、1944 年に翁が創唱した三尊道運動という草の根文化運動の特徴と仕組み、目的が紹介され、それが世界・人類という大局的視野を備えた個々の文化的社会改革であるという点で、彼の「世界人」思想のより徹底された形態であったという認識が示された。

コメント：守屋友江氏

三者の発表後、守屋友江氏が各発表者にコメントを述べた。はじめに、今回の研究会が、日本文学、アメリカ文学、移民地文芸、宗教学、移民研究、アジア系アメリカ研究など諸領域が交錯する場に生まれるもの、領域別の視野では見落としてしまう狭間の人々を見ていく試みであり、同時に、三者の同時代史として共通性や独自性を考察していく方向へも広がり得るものであるという総括がなされた。

次に各発表について、堀氏に対しては、指月の文芸の源泉となっている禅は、芸術家気質の孤高性やユーモアを特徴としており、伝統的な禅には収まり切らない一歩踏み出した面があったのではないかという意見が示された。また、日本の文壇や既成教団とは距離をおいていく現実のなかで、指月のいう〈郷愁〉とはどこへ向かうものであったの

かという問いがなされた。末村に対しては、千崎と禅窟の人々が、師弟という垂直的関係ではなく、同門弟子のような水平的関係を構築していたことを指摘したうえで、その双方向的関係から、千崎がいかなるフィードバックを受けていたのかという問いがなされた。また、千崎とルイスとの交流に関して、教義ではなく文化を介したからこそ、交流が成立し得たのではなかという意見が示された。水野氏に対しては、翁の思想がもつ特殊と普遍の繋がり、特殊から普遍へという構造を押さえたうえで、戦中に彼が用いた「日本精神」が、当時の排外主義的「日本精神」と異なることを指摘し、そこにも特殊と普遍が連絡する翁思想の一面を看取し得るのではないかという意見が示された。また、翁が日本の源流として、なぜ東アジアではなくインドを選んだのかという問いが提示された。

コメント後、各発表者からひと言ずつ応答があった。はじめに堀氏は、『郷愁』刊行後の日本への一時帰国を機に、指月は日本社会･日本人から乖離する傾向を示しており、その詩境に変化がみられる点に留意する必要があると応答した。そのうえで、三木露風の評論を踏まえ、指月の〈郷愁〉とは、単なる望郷ではなく、彼が求めた宗教的真理の世界への郷愁、彼の詩とはそうした世界から下りてきた表現であったと考えられるという回答が示された。次に末村から、千崎と弟子との水平的関係について、近代教育思想の影響という積極的側面と、印可を受けていない引け目という消極的側面があったのではないかとの応答がなされた。弟子からのフィードバックに関しては、現時点で実例は見出せていないが、英語原稿の校正やアメリカの社会・思想・文化の理解という面で、恩恵を受けていたと考えられるという見解が示された。最後に、水野氏は、翁のインドへの関心と渡印について、いくつかの偶然が重なった結果であるとの回答を示したうえで、具体的な要因として、富山出身の元代議士で日印間の文化交流を推進していた人物からの誘いや、仏教の篤信家であった父からの助言と父の死、当時の日本の表面的な西洋化に対する反動などを提示した。加えて、柳田国男の影響から、インドだけでなく氏神など日本固有の宗教や文化にも興味を寄せていたという翁の一面が紹介された。

フロアとの質疑応答

一人目は、20 世紀初頭の西海岸、とくにシアトルの邦字紙資料の現状を問う質問で、堀氏に対してなされた。堀氏は、とりわけ 1910 年代のシアトルの邦字紙資料がきわめて少ない点に同意しつつ、『大北日報』に掲載された 1930–1940 年代の指月の記事に関しては、日付の特定が進んでいると回答した。質問者からは、オンライン・アーカイブの文字認識精度が低く実質的に機能していないことが問題点として示された。

二人目の質問は、現代のセトラー・コロニアリズムの観点から、発表で取り上げられ

た日系移民三者がアメリカで白人以外の民族コミュニティにどのような影響を与えたのか、彼らの活動に他コミュニティ抑圧に繋がる部分があったのかどうか、さらに、ジェンダーの観点から、三者の活動が男性中心性を発揮する活動だったのかどうか、という二点であった。水野氏からは、当時の日系人がいわゆる「女性的な」仕事を担っていたことなどを理由に、翁に関しては、彼のコスモポリタン思想も含め、むしろフェミニスト的一面が見られるとの認識が示された。堀氏は、渡米前から指月が属していた居士禅グループには平塚らいてうを代表とする先進的知識人女性が多く、また渡米後の弟子にも中産階級女性が多く含まれていたと紹介し、そもそも伝統的な日本仏教諸派とは異なるあり方であったと応答した。守屋氏は、セトラー・コロニアリズムに関して、ハワイと本土というアメリカの国内状況の違いを挙げ、本土では民族コミュニティ同士が頻繁に交流する機会がなかったのではないかと指摘し、日系人の植民地主義を考える場合、移住先の政治状況や文脈を慎重に見極める必要があるという見解を示した。

おわりに

以上、2023 年 3 月 5 日に開催された「文学と宗教」研究会「アメリカにおける越境者の文学――仏教との関わりから考える」の報告であった。予想を大幅に超える 57 名の参加申し込みがあり、問い合わせアドレスに翌日以降も複数の質問や情報が寄せられるなど、本テーマに対する関心の高さが窺える研究会となった。今回は、20 世紀アメリカ、日系移民、仏教という枠組みで開催したが、「文学と宗教」という主題が照射する範囲は、無限の広がりをもっている。次回以降も研究会を重ねていきたい。

すえむら・まさよ
（南山宗教文化研究所）